

————— 政治の現実に悲観せず勇気をもって生きよう —————

「福島原発事故で日本は変わるかもしれない」と、国民は期待した。しかし、衆議院選挙の結果は、再び原発推進の旧体制に戻ったかに見える。国民は福島原発事故に何を学んだのかが問われている。今問われているのは、新たな社会の扉を開く価値観の転換である。

### 原発の理不尽

原発は、開発当初から理不尽に満ちた技術だった。「原発の立地は人口密集地を避けなければならない」という、国の「立地審査指針」に、それは端的に書かれている。大事故を前提に被害を最小限にするため、原発は過疎地に作られた。しかし、立地市町村の住民一人ひとりにとって、事故で受ける被害の大きさ・重さは、こうした確率論とは無縁である。福島で人々はまさにこうした現実を強制されたのだった。また、過疎地の経済的困難につけ込み、「交付金」という麻薬で人々の理性も奪った。ひとたび原発が出来れば、金の魔力で2基、3基と増殖する。その裏には、大事故による被曝のリスクが隠されていたが、原子力村の専門家たちによって「安全神話」が布教され、人々の思考回路を断ち切った。福島原発事故で、こうした事実が改めて浮き彫りになったのである。理不尽は事故だけではない。事故がなくてもいずれやってくる、廃炉に伴う膨大な放射性廃棄物の処分に伴う被曝労働やコスト負担は、原発の電気とは無縁の将来世代が長きに渡って引き受けることになる。その期間は10万年である。科学の装いをしながら、原発はまさに「神話」の産物であった。それを可能にしたのは、「核を自由に操れる」という近代技術の傲慢である。近代の技術社会で、思想家や哲学者が萎縮してしまったのも大きな原因である。10年前にチェルノブイリ救援・中部が招待し、日本各地で講演を行ったベラルーシの女性作家、スベトラナ・アレクシェーヴィチは、名古屋での講演で「チェルノブイリ原発事故の真の原因は、これまでの経済中心主義や便利第一主義という価値観である。今この価値観を変えなければ、第二のチェルノブイリは再び起こるだろう」と予言に満ちた発言をしていた。それが「フクシマ」だった。

### 価値観の転換こそが未来を作る

福島原発の放射能は、福島にとどまらず首都圏を含む広範囲の大地を汚染した。国の食品基準（100ベクレル/Kg）によって、汚染食品は国中に拡散している。もはや福島以前には戻れないのが現実である。その中でどう生き抜くのが問われている。日々食べる野菜やコメを何処で誰が生産しているのか、電気は何処で作られているのか、福島原発事故以前の多くの国民は気にも留めていなかった。経済さえ順調に回っていれば未来の幸せも保障される、と考えていた。だが、それは幻想だった。原発事故により一瞬にして水の泡と消えた。衆議院選挙の結果は、またもや国民が過去の成長神話を求めているかの様な錯覚をもたらしている。しかし、それはもはや通用しない時代に日本は突入した。高齢化に伴う人口減少や農業の衰退、未来世代が背負う現代のつけ、など、この国の未来はすでに明らかである。政治がどのようにあがこうと社会の未来は変えられない。福島原発事故は、そうした我々の未来を一步早く見つけたに過ぎないのである。

### 新たな社会像の創出を

ソ連が崩壊して社会主義の幻想は失われた。しかし、資本主義もまたその限界を露呈している。果てしない国際競争は、人々から仕事を奪い、貧富の格差を拡大している。かつて日本の経済成長を支えた技術は、すでに世界に拡散し、国内産業の地盤低下が続いている。こうした果てしない競争社会を我々はこれからも求めるのか、が問われているのである。新たな価値観とは何か。競争から共生へ、One for all, all for one（一人は皆のために、皆は一人のために）、これはフランス革命の標語であった。時代は変わっても普遍的価値は変わらない。（河田）